【シンポジウム「ヨーロッパ的理性の境界へ」提題】

# ヨーロッパ的理性はいかにして越境するか

## —— 世紀転換期の「心霊現象研究」の事例にそくして ——

村上　龍

## 序

皆さんは心霊現象というものについて、すなわち、口寄せやポルターガイスト、物質化現象、霊視、等々についてどのような見解をお持ちでしょうか。皆さんの見解はそれぞれにことなるでしょうが、すくなくとも、こういった類いの現象が大学におけるまっとうな研究対象たりうるとお考えの方は、おそらく皆無でありましょう。

ところが、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけての、なかでもとくに世紀転換期の欧米では、どうやらそのような「常識」が通用していなかったようなのです。アメリカやイギリス、フランスなどではこの時代、たいへん高名な哲学者やノーベル賞受賞歴のある科学者など、錚々たる大学人が心霊現象に多大な関心を寄せ、その「研究」に血道をあげていました。

このような、現代人からすれば「奇矯な」と形容するしかない心霊現象への取りくみなど鼻で笑ってやりすごすこともできましょうし、あるいはそれがむしろ健全なのかもしれません。しかしながら、熱狂がかくも広範にわたり、かつこれほどまでに持続的であったことに鑑みるとき、ここにはなにか看過しがたいものがあるようにも思われます。一流の学者が心霊現象に関心を寄せ、「心霊現象研究」なるものに手を染めていた事実を、我々は一体どのように評価したらよいでしょうか。

いささか奇をてらい過ぎた感も否めませんが、本提題ではそのことの考察をつうじて、「理性の境界」という問題に、近代ヨーロッパ的理性それ自身のがわの視座からアプローチしてみたいと思います。

## 一、心霊現象とその「研究」の概要

これから我々が問題としたい学者たちは、具体的にはどのような心霊現象に関心を寄せ、「研究」していたのか。まずはその点を概観しておきましょう[1]。

ブームの発火点となったのは、アメリカで起こった「ハイズヴィル事件」と呼ばれる一八四八年の出来事です。ニューヨーク州ハイズヴィルに居をかまえるフォックス家では、この年の三月下旬から不思議な物音が頻繁に聞こえはじめ、やがて次女と三女の姉妹は指音をつうじ、この叩音の主であるところの霊と意志疎通をはかることに成功する。この事件が新聞等の新興のメディアによって報じられるや、欧米諸国ではまたたくまに交霊会がブルジョワ家庭を熱狂させ、人々は嬉々として「テーブル・ターニング」に興じることとなったのです。

そうしたなかで、霊との交信にかんしてとくにすぐれた能力を発揮する、霊媒と呼ばれる人物が次々にあらわれ、彼らの霊的能力に接することを目的とした交霊会もさかんに催されるようになります。もっとも有名なのはダニエル・ダングラス・ホーム（Daniel Dunglas Home, 一八三三 - 一八八六年）でしょう。彼はどんなに明るく、また騒がしい環境下にあっても安定して霊と交信し、自らの身長を伸び縮みさせ、空中を浮遊し、高温に耐え、自在に叩音を発生させ、火の玉を飛ばし、部屋を振動させたと言われています。また、とくに物質化現象に秀でていたとされるフローレンス・クック（Florence Cook, 一八五六 - 一九〇四年）も特筆に値する霊媒です。彼女はケイティー・キングという名の霊にたびたび完全な肉体をあたえたということです。

この時代の一部の哲学者、科学者たちは、まさにこうした霊媒の存在に、そして彼らがひき起こす心霊現象に関心を寄せたのでした。一八八二年にはそれらの人々によって、ロンドンを拠点とする心霊現象研究協会（The Society for Psychical Research）が設立されます。同協会の歴代の会長を挙げるだけでも、倫理学者ヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick, 一八三八 - 一九〇〇年）、進化論の草分けをなしたアルフレッド・ラッセル・ウォレス（Alfred Russel Wallace, 一八二三 - 一九一三年）、化学者ウィリアム・クルックス（William Crookes, 一八三二 - 一九一九年）、物理学者オリヴァー・ロッジ（Oliver Joseph Lodge, 一八五一 - 一九四〇年）、哲学者、心理学者

ウィリアム・ジェイムズ（William James, 一八四二 - 一九一〇年）、生理学者シャルル・リシェ（Charles Robert Richet, 一八五〇 - 一九三五年）、哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 一八五九 - 一九四一年）等々、錚々たる名前がならびます。

ここに集った学者たちの思惑はかならずしも一様ではありませんでした。ただし、心霊現象の検証をつうじて死後の生の証明をめざすにせよ、反対に彼岸の否定をめざすにせよ、とられた手法は同一でした。すなわち、霊媒を対象とした実験ならびにインタビュー、および、記録や伝聞の収集と比較検討、そしてアンケート調査です。

## 二、一定の確実性をそなえた一科学としての「心霊現象研究」

さて、彼らが上述のような心霊現象に関心を寄せ、また上述のような「心霊現象研究」に身を投じていたことをどのように評価すべきか、これが我々の問いでした。この点を考えるにあたって、フランスの哲学者ベルクソンの文章に手がかりをもとめることにします。彼は自ら「心霊現象研究」を手がけることはありませんでしたが、先述のように心霊現象研究協会の会長を務めた経歴を有し、その在職時におこなった講演で、「心霊現象研究」が総体としてどのような性格を有するものかについて語っています。以下では、「「生者の幻」と「心霊現象研究」」と題されたこの一九一三年の講演の記録をみてゆきましょう。

ベルクソンは講堂を埋めつくす協会員らにむかって、自分は「あなたがたの報告を注意ぶかく読み、熱心な好奇心をもってあなたがたの研究をたどっている[(2)]」と語りかけます。ところが、「あなたがたのやっておられるような研究を「科学の名において」否定する[(3)]」哲学者、科学者はいまだに多く、協会員はたえず彼らの白眼視にさらされている。この講演の主眼は、これら否定論者の反論をいわれなき偏見として退けることにあります。

ベルクソンによれば、上述のごとき否定論者が論拠としてもちだすのは、「あなたがたの研究する現象は疑いもなく自然科学の対象となる現象と同じ種類のものであるのに、あなたがたがとる方法、またとらざるをえない方法は、自然科学の方法と何の関係もない場合が多い[(4)]」という点です。すなわ

ち、ポルターガイストや物質化現象等々にしても、それがいやしくも物理的、化学的、生理的な現象であるならば、物理学や化学、生理学、等々にそくして解明されるべきだというのが、彼らの言い分であるわけです。

ところで、自然科学的方法とは何か。近代的な自然科学は「観察と実験」に、それももっぱら「計量」を目的としたそれにもとづいており、その意味でそれは「数学の娘」として自己規定することにより成立しています。さいしょに誕生した天文学と力学も、その次にやってきた物理学も、またそれに付随してうまれた化学も、比較的あたらしい生理学も、世界を数式によって読みとこうとするかぎりにおいて、それらはおしなべて「理想［へ向かうかのように…］数学へ向かって」いるのです[5]。

じっさい否定論者らの言うように、心霊現象研究協会の構成員たちはそのような意味での自然科学的方法をとらないし、またそもそも、そうした方法をとることはしばしば困難でした。たしかに、彼らもまた霊媒を対象とする観察、実験を実施し、何がしかの計量をおこないましたが、様々な制約ゆえに、それは実験室におけるようにはうまくゆきません。だからこそ先述のように、彼らは実験の他に、霊媒へのインタビュー、記録や伝聞の収集と比較検討、アンケート調査、等々の方法に訴えたのです。「心霊現象研究」を「「科学の名において」否定する」人々は、この点を問題視するわけです。

しかしながら、ベルクソンに言わせれば、たとえ次善の策としてこれらの代替的な調査手法に訴えざるをえないとしても、協会員らの研究はやはりある程度の確実性に達しうるのであり、したがって、「物理学や化学のような方法をとれないということから、心霊［現象］研究は科学的でないと結論[6]」すべきではありません。

> 真実の幻覚が過去にさかのぼるものであれば、あなたがたは文献を研究し、批判して、歴史を書きます。その事実が昨日のものであれば、あなたがたは裁判の審理のような方法をとります。あなたがたは証人たちにあたってみて、かれらをたがいに対決させ、かれらについてしらべます。わたしはと言えば［…］あなたがたが記録した大部分の場合には、幻覚を真実とみとめる前に一人または何人かの人［に…］その幻覚の話［が話され、かつそれが…］しばしば［…］書きとめ［られている…］こと

を知り、［しかもそうした…］事実［の数がきわめて多くて…］とくにそれらの事実がたがいに類似して同族のようであること［…］を知りますと、わたしはたとえばスペインの無敵艦隊が敗北したことを信ずるのと同じようにテレパシーを信ずるようになります[7]。

歴史家がはるかな過去についてそうするように、また裁判官が直近の過去についてそうするように、心霊現象研究協会のメンバーは文献上の、および口頭の証言を可能なかぎり収集し、それらを相互に突きあわせる。そのうえで多数の事例のあいだに類似がみとめられたならば、当該の心霊現象を肯定することはむしろ理にかなっていると言わなければならない。なるほど、実験と計量とによらないこの方法をつうじては、「ピュタゴラスの定理の証明のような数学的な確実さ」や、「ガリレオの法則の立証のような物理学的な確実さ」にまで達することはないでしょう[8]。しかしたとえば、一九世紀をつうじて確立されつつあった生物学なども、「まだ数学的な形がないし、そういう形をとりそうでもない[9]」にもかかわらず、すでに自然科学の一角を占めるに至っている。だとすれば、狭義の自然科学のそれには劣るとしても、「心霊現象研究」もまたそれなりに確実性をそなえた一個の科学とみなすべきであって、これを上述のような仕方で断罪することは不当である。ベルクソンはそのように言うのです。

そうすると、「心霊現象研究」についてのベルクソンの考え方は、次のようにまとめられるでしょう。第一に、なるほど「心霊現象研究」は否定論者の言うように、いわゆる自然科学の対象になるのと同種の現象を扱いながらも、数学に範をもとめる狭義の自然科学的方法をとることがない。第二に、しかしながら、否定論者の見解とは裏腹に、「心霊現象研究」は代替的な方法をつうじてある程度の確実さに達しうるのであり、そのかぎりにおいて、それはやはり一つの科学として位置づけられるべきである。だからこそ第三に、この「研究」の動向は興味ぶかく見守るに値する。

## 三、拡張されたデカルト哲学

では、それなりに一個の科学と見なされるべき「心霊現象研究」を興味ぶ

かく見守ることは、哲学者ベルクソンにとってどのような意味をもつのか。「心霊現象研究」によってもたらされる知見は、いかなる点で彼の哲学上の思索に益するところがあるというのでしょう。上述の講演のなかでは、そのことは明確に語られてはいません。そこで、ベルクソンが哲学と科学とのあいだの関係を、とりわけ自身の思索と科学とのあいだのそれをどのように考えているのか、この点をみることにしましょう。

ベルクソンは「フランス哲学概観」（一九一五年）と題された論考のなかで、「現代哲学のすべて」がデカルトの「≪明晰判明≫なイデーの哲学」に「由来している」ことにふれたうえで[10]、そのなかでもとくに、「哲学と数学との間の結びつき」が「あまりにも緊密な」デカルト以来、「フランス哲学の本質は科学にささえられている」ことを指摘しています[11]。そしてそのことは当然、サンフランシスコ万博での展示のために書きおろされたこの論考の著者であり、その意味では当時のフランス哲学の代表者として公式にみとめられていたと言ってよいベルクソン自身にもあてはまる、というわけでしょう。

じっさい、彼は処女作以来、科学上の成果の綿密な検討のうえに思索をいとなんできました。とはいえ、ベルクソンが依拠したのは、さきの講演のなかで「まだ数学的な形がないし、そういう形をとりそうでもない」と言われていた生物学であり[12]、あるいはまた、やはりおなじく数学的な形をとりそうもない心理学であって[13]、それゆえにこそ、数学と緊密にむすびついたデカルト哲学とは相容れない議論を彼はしばしば展開するのです[14]。しかしそれにもかかわらず、自らの思索がデカルトのそれの延長線上にたしかに位置づけられるものとベルクソンは考えます。そのことはたとえば、フランス哲学会における討論の記録「心身並行論と実証的形而上学」（一九〇一年）をみれば明らかです。

> ほぼ一世紀以前より、われわれ［は…］普遍［数］学の希望を断念しなければならなくなった［。. . .］新しい諸科学がこの断念そのものの上に構成されました。これらの科学は、いつかは数学的定式に達するという下心なしに、観察し、実験します。［…］それゆえ、デカルトのかくかくの回答を再検討することを要求しても、わたくしはデカルトの方法に

> 不忠実であるとは思いません。それは［…］自然現象の中に数学的機構にうまく還元できない複雑な組織を認める意向のある、より柔軟な科学を前にしては、デカルト主義の哲学者も、おそらく、デカルトの回答の再検討を要求するであろうという意味で、そう思わないのです[15]。

一七世紀には天文学や力学、物理学など、根本的には数学に還元されうる科学しか存在せず、だからこそデカルトは数学、およびこれら科学にもとづいて「明晰判明な」哲学をたちあげた。しかしその後、生物学や心理学、社会学など、かならずしも数学的定式に固執しない、「より柔軟な」科学が次々に確立された。数学に範を求めないがゆえにおそらくは確実性の点で狭義の自然科学に劣る[16]、デカルトの時代には存在しなかったこれら新興の諸科学に依拠して哲学的な思索をいとなむことは、そしてその結果、ときとして「明晰判明な」デカルト哲学と衝突しさえすることは、ベルクソンの考えではデカルト的な発想と相容れないどころか、むしろ正当にもデカルト主義的であるのです。

さて、さきの講演での発言がたんなる社交辞令でないとすれば、「心霊現象研究」にたいするベルクソンの関心も、おそらくはこうした問題意識に裏うちされていたのでしょう。つまり、「心霊現象研究」とはもっともあたらしい「より柔軟な」科学に他ならず、したがって、これに依拠してすすめられる哲学的な思索もまた拡張されたデカルト哲学と見なされるべきだ、というわけです。現にベルクソンは、『道徳と宗教の二源泉』（一九三二年）という晩年の著作のなかで、死後の生の問題について語る文脈で「心霊現象研究」を引きあいにだしているのです[17]。

## 結語

以上みてきたように、すくなくともベルクソンの見解にしたがうかぎりでは、「心霊現象研究」は確実性の点では狭義の自然科学に劣るが、やはりそれなりに一個の科学としてみとめられるべきであり、さらには、これにささえられた哲学上の思索もまた、数学、ならびに狭義の自然科学に依拠する「明晰判明な」デカルト哲学の拡張されたバージョンと見なされるべきである。

そしてこの見解は、「心霊現象研究」に真面目にとり組んでいた心霊現象研究協会の構成員たちにも、おそらくは大なり小なり共有されていたはずです。

さて、ことの次第がそのようであるとすれば、世紀転換期の欧米における「心霊現象研究」の事例を手がかりに、「理性の境界」という問題について次のような見とおしが得られるでしょう。かつて一七世紀に近代ヨーロッパ的理性は、「明晰判明」という一定の基準によって自らを境界づけた。とすればこのとき同時に、境界の外側は「明晰判明」性を有さぬものとして規定されたことになる。ところが、近代ヨーロッパ的理性は、明るい内側と暗い外側とのこの本性上の差異をいうなれば度合いの差異に換算することによって、外部の暗がりにまでかすかな光を見いだそうとする。相対的にひくい確実性を見積もりながら「心霊現象研究」をそれなりに一個の科学として位置づけ、これに依拠してデカルト哲学の拡張を目論む世紀転換期の動向は、まさにそのような仕方での越境の振る舞いに他なりません。

そして、あらためて考えてみると、このような仕方での越境は、どうやら近代ヨーロッパ的理性の常套手段とも言えそうです。たとえば、私が講義を担当している「美学」という学問分野も、じつはそのようにしてたん生しました。西洋哲学は一七世紀に、哲学的に有意義な認識をいったんは「明晰判明な」表象に限定します。しかし、一八世紀にはいると、芸術作品に接したさいに得られるそれのように、「明晰」だが「判明」でない、換言すれば、「明晰」だが「渾然」とした、そのような表象にまで西洋哲学は触手をのばしはじめる。「美学」はまさにその瞬間に産声をあげたのです。

近代ヨーロッパ的理性がこうした越境の振る舞いを繰りかえしてきたのだとすれば、その光は本質的に暗闇と溶けあう傾向を有していると言うほかはなく、そのかぎりにおいて、近代ヨーロッパ的理性の光にはあらかじめ暗闇が内包されてあると逆説的に言うこともできましょう。

## 註

(1) 以下にあげる諸事例については、ジャネット・オッペンハイム『英国心霊主義の抬頭――ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』（和田芳久訳、工作舎、一九九二年）に依拠した。

(2) ベルグソン全集第五巻『精神のエネルギー』渡辺秀訳、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）、七九 - 八〇頁。

(3) 同書、八〇頁。

(4) 同書、八二頁。

(5) 同書、八九 - 九〇頁。

(6) 同書、八五頁。

(7) 同書、八四 - 八五頁。

(8) 同書、八五頁。

(9) 同書、九〇頁。

(10) ベルグソン全集第九巻『小論集II』掛下栄一郎、富永厚、秋枝茂夫訳、白水社、二〇〇一年（一九六六年初版）、六二 - 六三頁。

(11) 同書、八一頁。

(12) Cf. ベルグソン全集第四巻『創造的進化』松浪信三郎、高橋允昭訳、白水社、二〇〇一年（一九六六年初版）。

(13) Cf. ベルクソン「時間と自由」平井啓之訳、『ベルグソン全集第一巻』、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）、九 - 二一八頁。

(14) Cf. ベルグソン全集第二巻『物質と記憶』田島節夫訳、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）年。

(15) ベルグソン全集第八巻『小論集I』花田圭介、加藤精司訳、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）、二一九 - 二二〇頁。

(16) Cf. 『ベルクソン講義録II』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、二〇〇〇年、二七二頁。

(17) ベルグソン全集第六巻『道徳と宗教の二源泉』中村雄二郎訳、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）、三八〇 - 三八二頁。

（本稿は、二〇一一年度国士舘大学哲学会シンポジウムにおける口頭発表の原稿に加筆、修正を加えたものである。）